

標準時周辺より

塚本 恵理 … 会社員。元造園業者。新しく園芸店を開こうとしている。

塚本 浩二 … (旧姓：大石) 恵理の夫。婿入り。元造園業者。入院中。

山崎 由梨江…浩二の入院する病院の看護師

千里 抄太郎…浩二と同じ病室の患者

月野 啓 …浩二と同じ病室の患者

駒崎 洋輔 …浩二と同じ病室の患者

駒崎 直子 …洋輔の姉

町田 優 …公務員。市の財務課勤務。空き家の斡旋をしている。

笠間 利子 …恵理の友人

桑原 早苗 …恵理の友人

その他、看護師 1、2

標準電波送信所

なだらかな山の頂上に、巨大な鉄の棒が突き刺さっている。

鉄の棒は、山頂から 250m ほどの高さがある。

鉄の棒は、六方向に張り巡らされたワイヤによって支えられている。

鉄の棒を中心とした山の全面がアンテナとなり、周囲に向けて電波が発信されている。

電波は、この国の標準時刻を知らせている。

電波は、この国の領土における、北部東部方面全域をカバーしている。

電波の周波数は 40kHz であり、ひとつの波の長さは 7.5 km ほどある。

電波は、24 時間 365 日、休むことなく標準時を送信し続けている。

総合病院・入院病棟・3階 (6月)

病室が並んでいる。病棟内はクーラーが効いている。
病室の中の一部屋。廊下に続くドアは開け放たれ、窓は閉まっている。
4床あるベッドは、窓際の1つだけが空いている。
入口側の2つのベッドには、それぞれ千里抄太郎と月野啓がいる。
千里は、ベッドの背にもたれて本を読んでいる。
月野は、ベッド備え付けのテーブルを出して、その上で手紙を書いている。
窓辺のベッドでは、塚本浩二が眠っている。

病棟のエレベーターが開いて、塚本恵理と、看護師の山崎由梨江が降りてくる。
山崎は、ストップウォッチを手に、エレベーターの扉を観察する。
エレベーターの扉が閉まるまでの秒数を計っている。
廊下を歩きかけて、山崎の様子に気づく恵理。
恵理、山崎の様子を見ている。
山崎、恵理に気づいて、

山崎「(笑って) 変ですよネ？」

恵理「なにされてるんですか？」

山崎「秒数計ってるんです」

恵理「エレベーターの？」

山崎「そうです。1階から2階までの秒数。1階から3階までの秒数。

扉が開いてから、自動で閉まるまでの秒数」

恵理「なにかあるんですか？」

山崎「移転のためなんです」

恵理「移転？ ああ。ここの病院？」

山崎「はい」

恵理「いま駅前につくってる」

山崎「そう。そこに移るための準備です」

恵理「え？ それって秋頃じゃなかったでしたっけ？」

山崎「そうです。今年の10月」

恵理「いま6月ですよ」

山崎「病院移転って、長い準備が必要なんです」

恵理「へえ」

山崎「しかも、相当入念にやらなきゃいけないんです」

恵理「そうですね。すごい入念ですね」

山崎「エレベーターの開閉秒数とか、廊下の歩数とか、全部正確に出してくれって」

恵理「大変ですね」

山崎「スムーズに移転するには必要らしいです」

恵理「そうなんですね」

山崎「すぐに、パッと移れたらいいんですけどね」

山崎、エレベーターのボタンを押す。同時にストップウォッチのボタンも押す。

エレベーターの扉が開く。山崎、ストップウォッチを見ながら乗り込む。

山崎、恵理に会釈する。恵理、会釈を返す。

山崎を乗せて、扉が閉まる。

恵理、廊下を歩いていく。

看護師1が、歩く速度と歩幅を整えるのを意識しつつやってくる。

看護師1、廊下の歩数を数えながら歩いている。

看護師1、ピタッと立ち止まり、会釈する。また歩きながら歩数を数え始める。

恵理、看護師1を不思議そうに見送る。

恵理、浩二たちのいる病室にたどりつく。

恵理が入ってくる。

恵理、千里と月野に会釈する。千里と月野、気づいて会釈を返す。

千里、廊下の方を示して、

千里「見ましたか？」

恵理「え？」

千里「あっちこっち測ってるの」

恵理「ああ。見ました。移転のためみたいですね」

千里「騒がしくてかなわんですよ」

恵理「ずっとあんな調子ですか」

千里「今日は朝からずっと」

恵理「そうですか」

千里「(浩二を見て) 昼寝できるご主人が羨ましいですよ」

恵理も浩二の寝顔を見る。笑う。

恵理、窓際まで歩き、窓の外を見る。外には森がある。

恵理、目を落として、寝ている浩二の顔を改めて、見る。

恵理、窓際のもう一つのベッドが空いていることに気づく。そちらを見る。

月野が、テーブルをトントンと叩き、両手をパンパンと合わせる。

もう一度テーブルをトンと叩く。

月野と千里、顔を見合わせる。千里が月野にうなづく。

月野は、書いていた手紙をしまう。

恵理、月野たちの挙動に気づく。月野を見る。

千里、恵理に向かって、

千里「じゃあ、奥さん。私たち、ちょっと出てます」

恵理「ああ。はい」

二人、恵理に会釈する。連れ立って病室を出ていく。

恵理、二人が出て行くのを見送る。

恵理「なんだあれ？」

恵理、浩二の寝ているベッド脇の椅子に腰掛ける。

恵理、ベッドサイドテーブルの置き時計に気づく。

アナログ表示の時計。

恵理、置き時計を手に持ってみる。

浩二が目覚める。顔の向いている先に恵理がいる。恵理を見ている。

恵理の眼は時計の秒針を追っている。

浩二「その時計、もらったんだ」

恵理「(気づいて) 起きてたの？」

浩二「いま起きた」

恵理「もらったって？」

浩二「清水さんから」

恵理「清水さん、なにかあったの？」

恵理、正面にある空いたベッドを見る。

恵理「清水さん、ベッドそこだよね」

浩二「昨日までね」

浩二、体を起こす。

正面の整えられたベッドを眺める。

浩二「退院したんだよ」

恵理「ああ、そうか。そうだよね」

浩二「いまちょっと、死んだと思っただろ」

恵理「まさか。思わないよ」

浩二「思ったんだろ？」

恵理「ごめん。正直、ちょっとよぎった」

浩二「ほらね。縁起でもない」

恵理「でもほら、トシがトシだし」

浩二「それは言い訳にならん」

恵理「90 だっけ？」

浩二「いまは 91。今年で 92」

恵理「よく覚えてるね」

浩二「1 週間だけの昭和元年生まれ」

恵理「ああ、そっか」

浩二「うん。それで俺が、1 週間だけの昭和 64 年生まれ」

恵理「そうそう。昭和の最初と最後。前にそんな話してた」

浩二「うん」

恵理「なんか縁があるって」

浩二「うん。なかなかないよね」

恵理、時計をサイドテーブルに置く。

恵理「退院してよかったね」
浩二「本人あんま嬉しそうじゃなかったけど」
恵理「悪いと思ったんじゃない？」
浩二「嬉しそうにするのが？」
恵理「うん」
浩二「いやいや。そんな爺さんじゃないよ」
恵理「そっかな」
浩二「あの爺さん、コイコイの事しか考えてないよ」
恵理「(笑って) 言いかた言いかた」
浩二「全然、弱かったけど」

恵理、改めて時計を眺めてみる。

恵理「…もしかしてコレ、花札でぶんどったりしてないよね？」
浩二「違うよ」
恵理「本当に？」
浩二「家にもっといい時計あるからやるって」
恵理「(笑って) それは言いそう」

浩二、時計を手にとって眺める。

浩二「これって電波時計なんだって」
恵理「ふうん」
浩二「電波時計って、どういう仕組みか知ってる？」
恵理「知らない」
浩二「専用の周波数があって、その電波を受信して時間を調整するんだって」
恵理「ふうん」
浩二「で、標準時の電波を送信するために作られたばかでっかいアンテナがあるんだよ。
それが、こいつに送られてくる。(時計を掲げて) いまも送られてきてる」
恵理「ほお」
浩二「そのアンテナって、日本に二つしかなくて。そのひとつが都路の山の上にあるんだって」

恵理「へえ。都路って。ここ、近くだ」

恵理、窓の外を眺めてみる。

浩二「そっちじゃないって」

恵理「どっち？」

浩二「(病室の扉を指差す) こっち」

恵理「なんだ」

浩二「どっちにしる、ここから見えないよ」

恵理「なんだ」

浩二「都路って言っても、もっと川内の方」

恵理、ベッドの端に腰掛ける。

恵理「もうひとつは？」

浩二「え？」

恵理「ばかでっかいアンテナ。日本に二つって、もうひとつはどこ？」

浩二「どこだっけな？ 九州のほう」

恵理「九州かあ」

浩二「…もっとちゃんと聞いときゃよかったな」

浩二、置き時計を恵理に渡す。

恵理、受け取って、浩二の隣に座り直す。

置き時計を眺める。

恵理「でもなんで、清水さん、そんな電波時計に詳しいの？」

浩二「さあ」

恵理「その話はしなかったんだ」

浩二「こだわりってしか、言わなかった」

恵理「こだわりって、電波時計が？」

浩二「うん。正確な時間を知っておきたいらしい」

恵理「なんで？」

浩二「黙祷するとき。ちゃんと、その時間じゃないと困るんだって」

恵理「黙祷？」

浩二「うん。やるだろ黙祷」

間が空く。

恵理「うん。するね」

浩二「その時間が、半秒でもズレてるのが許せないって」

恵理「携帯とかテレビの時計は？ あれだって正確だよね？」

浩二「携帯もテレビも信用できないって」

恵理「さすが昭和ヒトケタ」

浩二「ホント。どっちも電波なのにね」

恵理「そーいやそーだ」

間が空く。

病棟のエレベーターが開いて、看護師の山崎が降りてくる。

山崎、今度は、病室を見回っている。

恵理「でも、黙祷の時はサイレン鳴るんじゃない？」

浩二「全部の黙祷に、サイレンは鳴らないらしい」

恵理「全部って？」

浩二「あれくらいの歳になると、黙祷する日が多くあるみたいだよ」

恵理「そうなんだ」

浩二「いまはほとんど忘れられている日の、忘れられてる時間にも、むかし何かがあって。

あの爺さんは、そういうのも、ちゃんと黙祷したいんだってさ」

恵理「義理堅いんだね」

浩二「そうやって自分を、係留してるらしい」

浩二「係留？」

浩二、目の前に架空の縄を作る。架空の杭に縄を巻きながら、

浩二「こう、縄でくくって、流れていかないようにしてる」

恵理「なにに流されるの？」

山崎、恵理と浩二のいる病室に入ってくる。
浩二と恵理、気づいて山崎をみる。

山崎「院長、見てないですよ？」
浩二「談話室で将棋じゃないですか？」
山崎「あっちはいなくて」
浩二「じゃあ、わかんないですね」
山崎「そうですか。…お邪魔しました」

山崎、病室を出て行く。

恵理「お邪魔しました？」

浩二と恵理、顔を見合わせる。
恵理、浩二から距離をとって、ベッド脇の椅子に座り直す。
時計をサイドテーブルに置く。
間が空く。

浩二「店の場所、決まった？」
恵理「いまいちだなあ」
浩二「何軒か集めて廃校まるまる借りるって話は？」
恵理「全然。まとまり悪くて」
浩二「やっぱりな」
恵理「まず廃校が多すぎてさ。どの廃校にするかでもう、まとまなくて」
浩二「廃校って、そんなある？」
恵理「市内だけで10こくらいあるよ」
浩二「そんなに？」
恵理「地震の前から、じわじわ統合されてるからね」
浩二「ああ。そうか」
恵理「建物だけは残るんだよね」
浩二「解体するにも金がかかるからね」
恵理「それね」

浩二「学校使うのやめて、どうすんの？」

恵理「いまは市役所の人に、よさそうな空き家探してもらってる」

浩二「そうか」

恵理「選びたい放題だって」

浩二「すごい言い方だな」

恵理「他に言いようがないでしょ」

間が空く。

浩二「まあ、あんまり焦なくても」

恵理「うん。…でも、なにか進めてたほうが楽だから」

浩二「そっか」

恵理「うん」

恵理、椅子を立つ。

恵理「お茶いれようかな」

浩二「うん」

恵理、サイドテーブル下のキャビネットを開ける。

紅茶の缶と、ポットとカップをふたつ出す。それからトレー。

トレーに乗せて、出て行く。

浩二、恵理の後ろ姿を見送る。あくびをする。ベッドに横たわる。

恵理、病室の隣にある給湯室へ。

古い家・空き家 (7月)

木造平屋の古い家が建っている。

町田優と、恵理、雑草がまばらに生えた庭を歩いてくる。

鳥の鳴き声が聞こえている。

町田、立ち止まる。恵理も立ち止まる。

町田「変わった鳴き声ですね。あの鳥」

恵理「本当ですね。変なリズム」

町田「なんか調子狂うな」

恵理「なんていうか、歩くテンポも狂いますね」

町田「あ、止んだ」

二人、耳を澄ます。鳥の鳴き声は聞こえない。

二人、再び歩き出す。

町田「裏手に、ハウス建てられそうな場所あるんですけど」

恵理「はい」

町田「そっちは後で案内しますね」

恵理「お願いします」

恵理、庭を見渡す。

恵理「こっちの庭も、充分広いですね」

町田「ええ」

恵理「そことか、植木置いとくのちょうどよさそう」

町田「もともとは、ここも生垣があって」

恵理「ああ」

町田「そこにも樺の木が生えてたんですけど」

恵理「除染ですか？」

町田「はい」

町田と恵理、玄関にたどり着く。

町田、玄関の鍵を開ける。そのまま引き戸を開ける。

引き戸を開けると、奥の壁まで土間。

右手は空っぽの台所。

左手は上り框になっていて、上がると奥に畳の間が二つ。その奥に廊下。

畳の間の玄関方向には縁側が奥へと続いている。

畳は荒れている。

恵理「土間広いな」

町田「土間の奥の方、テーブル置いてあったんです」

恵理「ああ。ダイニングみたいな」

町田「はい。そういう使い方で」

恵理、土間の奥の壁まで歩く。

奥の壁を触ってみる。漆喰は、所々剥がれている。

恵理「ここに棚作って、鉢置いてもいいな」

振り返って、天井の梁を見上げる。

恵理「梁もすごい」

町田も、梁を見上げる。

恵理、畳の間に続く鴨居に、柱時計の跡が残っていることに気づく。

柱時計のかかっていた部分だけ、鴨居が日焼けしていない。

恵理「そこ。鴨居。柱時計かかってたんですね」

町田「ああ。日焼け」

恵理「はい」

町田「時計の形、残っちゃってますね」

恵理「この時計、古い形ですよ」

町田「そうなんですか？」

恵理「手巻き式かな」

町田「どうでしょうね」

恵理、上がり框まで歩いてくる。

上がり框に腰掛ける。奥の畳の間を眺める。

恵理、上がり框の、少しへこんだ床を触ってみる。

恵理「まだここは、生活感残ってますね」

町田「そうですかね」

恵理「はい。ところどころ」

町田「そうですか」

町田も、上がり框に腰かける。

土間を見渡す。

町田「この家族は、地震の後も住もうとしてたんですけど」

恵理「どうされたんですか？」

町田「もともと二世帯で住んでたんですね」

恵理「はい」

町田「地震の後、しばらくして、おばあさんが亡くなって」

恵理「ああ」

町田「お葬式が済んだら、みんないなくなりましたね」

恵理「そうですか」

町田「こういうのって、いなくなる時はいつも簡単なんですよね」

恵理「簡単？」

町田「はい。簡単っていうか。起こってること自体は簡単じゃないはずなんです。

…でも、起こり方っていうのかな。移り変わり方っていうのか。

…そういうのは、すごく簡単で。ふっと気づいたら、いつの間にかそうなっていて」

間が空く。

町田「流されるみたいに」

間が空く。

恵理「流される？」

町田「はい」

恵理「流されて、どうなるんですか？」

町田「さあ。どうなるんだろう」

恵理、町田を見る。

恵理「でも、ちょっとわかるかも」

町田、恵理を見る。

恵理「夫が倒れた時そんなこと思いました」

町田「卒中でしたっけ？」

恵理「そうです」

町田「それ、聞いてもいいですか？」

恵理「いいですよ」

恵理、上がり框の柱に触る。

柱をなでる。

恵理「夕方、いつもと同じ時間に仕事から帰ってきて。またふらっと買い物に出てって。

なんかちょっと挙動がおかしいなあ、と思って追っかけたら玄関の外で倒れてたんです」

町田「ああ」

恵理「もう意識がなくて」

町田「ああ。その時もう」

恵理「はい。それで救急車呼んで病院着いたら『奥さん覚悟してください』って言われて」

町田「着いてすぐ？」

恵理「そうです。…なんだ、こんなあっけないんだって思いました。

なんの感情も湧いてこなくて。ただ、そこで起こってることを眺めてるだけっていうか」

町田「助かってよかったですね」

恵理「ほんとに」

恵理、黙る。

町田も黙っている。

町田、立ち上がる。

町田「この家、もうちょっと案内しますね」

恵理「…ああ。はい」

恵理も立ち上がる。

町田「こっちの廊下の奥が、風呂になってるんです」

町田、台所の奥にある廊下に上がる。

右に折れて、そのまま廊下を進んでいく。

恵理、その場に立ったまま、町田の後ろ姿を見送る。

総合病院・入院病棟・3階（7月）

恵理、病室にいる。浩二のベッド脇に立っている。

浩二がベッドにもたれて、恵理を見ている。

浩二は、家屋の資料を手に持っている。

室内には二人だけしかいない。

浩二「どうしたの？」

恵理「…え？」

浩二「なんか急にぼーっとしたけど」

恵理「いま、私、なにしてた？」

浩二「間取りの説明」

恵理「間取り？」

浩二「空き家の」

恵理「空き家？（思い出す）空き家ね。そうだった」

恵理、改めて前を見る。

恵理「（前を指して）こっちがお台所」

浩二「うん」

恵理「そこまで説明した？」

浩二「うん」

恵理、架空の台所の方へ歩いていく。

その奥の架空の廊下を上がる。廊下を右に折れて、そのまま進む。
その先には架空の風呂場。

恵理「台所の奥に廊下があって、そこ右に曲がると風呂場」

浩二「風呂場ね」

恵理「こっち、もっと奥行くと、突き当たりはトイレね」

浩二「はいはい。厠はそっちね」

恵理、風呂場の引き戸を開ける。

恵理「風呂場の浴槽がね、これが広いんだ」

浩二「ふうん」

恵理「花とか、水につけておくのに良さそう」

浩二「そうだね」

恵理、風呂場から廊下を戻ってくる。

台所を通って、土間へ。

恵理、上がり框の方を向く。

恵理「こっちは畳の部屋があるって言ったでしょ？」

浩二「うん。二つ続いてるって」

恵理、上がり框をのぼって、畳の部屋に。

庭に面した縁側の方を向く。

恵理「で、縁側がこう続いてて。縁側伝いにもう一つの家屋と繋がってる」

浩二「ああ。そこで二世帯になってるんだ」

恵理「うん」

恵理、浩二のベッドの前に戻ってくる。

恵理「よさそうでしょ」

浩二「もしかして、もう決めた？」

恵理「うん」

浩二「やっぱり」

恵理「ダメだった？」

浩二「いや、ダメじゃないけど」

恵理「よかった」

浩二「(資料を見て) 確かに、改装も安く済みそうだし。立地もいいね」

恵理「そうそう。国道からすぐだし。駐車場のスペースもあるし」

浩二「ほんと、すっかり気に入ったんだね」

恵理「そうだよ。あんなどこなかなかないよ」

浩二「(資料見て) お」

恵理「なに？」

浩二「ここ見て、地図」

浩二、資料についている地図を恵理に見せる。

浩二「ここをずーっとまっすぐ行くと、標準電波送信所がある」

恵理「標準電波って。電波時計の」

浩二「そう」

恵理「清水さんの」

浩二「うん」

恵理「そのうち行こう」

浩二「行けるかな」

恵理「お店そこにしたら、いつでも行けるから」

浩二「そうだね」

恵理「退院する頃には、もう開店できるように準備しとくよ」

浩二「そうだな…」

恵理、浩二を見る。

恵理「なに？」

浩二「もうちょっと、待ってもいいんじゃない？」

恵理「なんで？」

浩二「そんな急ぐ必要ある？」

恵理「急いでないよ」

浩二「そうかな？」

恵理「なにか違和感あるの？」

浩二「違和感はないんだけど」

間が空く。

恵理「不満があるの？」

浩二「そうじゃないんだけど」

恵理「じゃあなに？」

浩二「ただ、ちょっと、今の俺には速すぎる」

恵理「はやすぎる？」

浩二「速度。…速度っていうカリズムがさ」

浩二、恵理を見る。

浩二「病気して、体感してるリズムが変わったのかもしれない」

恵理「え？ どういうこと？」

浩二「今の俺だと、恵理がやってることにうまく追いつけない気がする」

恵理「もともと始めたのはコージくんじゃない。入院きっかけにして、お店またやろうって」

浩二「確かにそうなんだけど」

恵理「充分待ったでしょ？ お金も貯めてきたでしょ？」

浩二「恵理の言う通りなんだけどさ」

恵理「なんでいま、そういうこと言うの？」

浩二、答えられない。

二人、黙る。

そこに、看護師の山崎が入ってくる。

小脇にモールス信号の本を抱えている。

二人、山崎に気づく。

山崎「院長、こっち来てないですよね？」

二人、顔を見合わせる。

浩二「…こっちには来てないですね」

山崎「ですよね」

恵理「いないんですか？」

山崎「院内探してるんですが…」

恵理「え？ それ大丈夫ですか？」

山崎「またふらっと帰ってくると思うんですけど」

山崎、持ってる本に気づく。

山崎、浩二のベッドまで歩いていく。

浩二に本を渡す。

山崎「あの、これ。小林先生から」

浩二、本を受け取る。

浩二「ありがとうございます。先生は？」

山崎「ちょっと急患で」

浩二「そうですか」

山崎、二人に会釈し、

山崎「じゃあ、失礼しますね」

二人、山崎に会釈を返す。

山崎、病室から出て行く。

恵理、山崎を見送って、

恵理「…この院長、しょっちゅういなくなるの？」

浩二「(本をパラパラめくりながら) 油売ってるだけじゃないかな」

恵理「それって問題ないの？」

浩二「だいたい、患者さんに付き添って、近くへふらっと…ってパターンだからさ」

恵理「そうなんだ」

浩二「医者としてはいい人なんだと思う」

恵理「院長には向いてなさそう」

浩二「そうかもね」

恵理「ここ、移転とかあって、いろいろ大変なのよね」

浩二「だから、結構ストレス溜まってるんじゃないかな」

恵理「人に任せちゃえばいいのよね」

浩二「他にやれる人がいないんだと思う」

恵理「…なんか、もったいないね」

浩二「うん」

浩二、本を睨んでいる。

恵理、浩二の眺めている本を見る。

恵理「モールス信号？」

浩二「そう。勉強中」

恵理「なんで？」

浩二、入口のドアを見る。

恵理「え？ なに？」

浩二「同室の二人いるでしょ」

恵理「うん」

浩二「あいつらさ、トントンパンパンやってるでしょ」

浩二、テーブルを叩き、手を合わせる真似。

恵理「ああ。やってるやってる」

浩二「あれどうも、モールス信号っぽい」

恵理「そうなの？」

浩二「一人は消防団、一人は船員で、無線に慣れてんだよ」

恵理「船員？ 船員ってどっち？」
浩二「月野くん」
恵理「え？ 船乗りなんだ？ 全然見えない」
浩二「結構優秀らしいよ」
恵理「へえ。見かけによらないなあ」
浩二「たぶんプライベートの通信表を作ったんだと思う」
恵理「ああ。優秀だから」
浩二「そう。それでどーも、夜中とかに交信してるんだよな」
恵理「そりゃ、寝れないね」
浩二「時々さ、笑ってんだよあの二人」
恵理「気になるね」
浩二「でも別に声出してるわけじゃないからさ。注意もできない」
恵理「確かに」
浩二「なんかだんだん怖くなってきちゃってさ」
恵理「なんで？」
浩二「なんていうのかな。夜の世界で自分だけ疎外されてる感じ」
恵理「言葉が通じない感じ？」
浩二「近いかもね」

恵理、浩二の顔を見る。

恵理「コージくん、それ、わりと深刻？」
浩二「いまはまだ大丈夫」
恵理「そう？」
浩二「でも、狭いところで毎晩毎晩だからね。
…もともとが、微妙なバランスで成り立ってる空間だから、ちょっと間違うとヤバ
い」
恵理「我慢できなかつたら言ってね」
浩二「そうなったら言う」
恵理「うん。ちゃんと言ってね」
浩二「でもその前に、コレ勉強してみるよ」
恵理「わかってみれば、どーせ大した話題じゃないと思うけど」
浩二「だからこそ気になるんだよ」

恵理「まあ、そういうもんだよね」

浩二、ベッドの中に本を隠す。

恵理「どうしたの？」

浩二、入口を示す。

すると、千里と月野が連れ立って室内に入ってくる。

千里と月野、恵理に会釈する。

千里「奥さんどうも」

恵理「こんにちは」

千里と月野、それぞれのベッドに戻る。

千里はベッドサイドテーブルから本を取って読む。

月野はベッドで横になる。

浩二と恵理、顔を見合わせる。笑う。

千里と月野、怪訝な顔で浩二と恵理を見る。

浩二と恵理、笑っている。

古い家・空き家 (8月)

土間の奥、漆喰の壁を塗っている町田。

風呂場に貯めた水で、手を洗っている恵理。

縁側に腰掛けて、弁当を広げている笠間利子と桑原早苗。

笠間「いやあー、ここはさー、絶対いい店になるね」

桑原「ほんとそれ」

笠間「こりゃ逃避できるな」

桑原「隠れ家だね」

笠間「そうそう。遊びにこよ」

桑原「うん。常連のふりして、すっかり占領してやろう」

笠間「そうそう。なんにも買わないけど」

桑原「たまには買ってあげたら」

笠間「いやあ。うちは園芸店で買い物しないな」

桑原「そう？ ご自宅にお花があると、奥様の生活も潤うんじゃないかしら」

笠間「あら？ まるで潤いがないようにおっしゃるのね」

桑原「カッサカサでしょ」

笠間「失礼な」

桑原「あら？ 潤ってらっしゃるの？」

笠間「干からびてます」

桑原「だよな」

笠間、桑原、笑う。

恵理、手を洗い終え、土間を通る。町田に休むよう声をかける。

町田、生返事。漆喰塗りを続けている。

恵理、玄関を出て、縁側へ。

恵理「さて。食べるか」

笠間「食べて食べて」

桑原「町田さんは？」

恵理「声かけたけど？」

三人、土間の方を見る。

町田、漆喰を塗っている。

桑原「なんであんな熱心なの？」

恵理「さあ」

桑原「いいところ見せよう！ みたいな感じ？」

恵理「いやあ。空き家が埋まるの嬉しいんじゃないかな」

桑原「ホントにそれだけかなあ」

桑原、恵理を見る。

恵理「え？ なに？」

笠間「…違うな」

恵理・桑原「ん？」
笠間「…ハマったな、あれは」
桑原「え？ 漆喰塗り？」
笠間「うん」
桑原「なんだ。そっちか」
笠間「何かが彼の心に火をつけたんじゃない？」
桑原「もしかして、天職見つけちゃった？」
笠間「このまま公務員止めちゃうかもねー」
桑原「あーあ、安定してたのにな」
笠間「でもほら、好きなことを仕事にしていた方がさ」
桑原「そりゃそうだ。そりゃそうだけど。ねえ」
笠間「職人の道は険しいからねえ」

恵理、おにぎりを食べる。

恵理「お、これうまい」
笠間「なに？ シャケ？ チーズ？」
恵理「(見せて) 明太子」
笠間「うわー！ あたりだそれ！」
桑原「明太取られたかあー」
笠間「狙ってたのになあー」

恵理、むしゃむしゃ食べる。

恵理「おいしい」
笠間「そうだろうよ」
桑原「ほかのも、ちゃんとおいしいから」
笠間「いいこと言った。その通りだ」

笠間、桑原もおにぎりを食べる。

桑原「ねえねえ。ピクニックとかいきたい」
笠間「いいね。いこういこう」

桑原「浩二さんが退院したら、みんなでいこうよ」

恵理「そうだね」

笠間「どこいく？」

桑原「どっかいいところある？」

恵理「わたし行きたいところある」

桑原「どこ？」

恵理「都路と川内の間に、山があるんだけど」

桑原「山？」

恵理「うん、山」

桑原「その山がなに？」

恵理「その山の上に、でっかいアンテナが立ってるんだって。それ見たい」

桑原「アンテナ？ なにそれ？」

笠間、携帯をとって、アンテナについて調べ始める。

町田、作業の手を休める。風呂場の水で手を洗い、廊下奥のトイレへ。

恵理「えーっとね。電波時計ってあるじゃない？」

桑原「…聞いたことは、ある」

恵理「あれって、標準時の電波を受信して、時計のネジが勝手に巻かれるんだけど」

桑原「うんうん」

恵理「そのアンテナで発信される電波が、日本中の電波時計のネジ巻いてるんだって」

桑原「へえ。日本中」

恵理「少なくとも、東日本はだいたいそう」

桑原「すごいね」

恵理「でしょ」

桑原「でもマニアックだな」

恵理「そうか？」

笠間「これのこと？」

笠間、恵理と桑原に携帯画面を見せる。

恵理「それぞれ。標準電波送信所」

桑原「この鉄棒、高さ 250m もあるのか」

笠間「鉄棒？ これって超巨大な鉄棒なの？」
恵理「そんなわけないでしょ」
桑原「いやいや。他に言い方なくない？ これ、すとーんって立ってる鉄の棒じゃない？」
恵理「いや。そうなんだけどさ」
桑原「そうでしょ？ 鉄棒でしょ？」
笠間「…でもこれ、敷地内立ち入り禁止だね」
恵理「えー」
笠間「この鉄の棒を中心にして、山の面が全部アンテナになってるんだって」
恵理「そうなんだ」
笠間「だから敷地内はフェンスで覆われてて、関係者しか入れない」
恵理「なんだよー」
桑原「え？ でも頼めば見学してくれるんじゃない？」
笠間「どうかな？」
桑原「いけるでしょ」
笠間「ちょっと調べてみる」
桑原「調べて調べて」

笠間、携帯をいじり始める。
それを見ている恵理、桑原。
桑原も自分の携帯を出して、調べ始める。
笠間と桑原、調べている。
恵理、おもむろに立ち上がる。

恵理「(自分の頬を触り) なんか、顔ベタベタする」
桑原「汗でしょ」
恵理「…ちょっと洗ってくる」
桑原「うん」

恵理、縁側に置いてあるバッグからタオルと洗面用品とる。
恵理、土間に出る。
そこに町田のいないことに気づく。立ち止まってあたりを見回す。
恵理、台所の奥の廊下へ入る。
町田、ちょうどトイレから出てくる。

二人、鉢合わせる。

恵理「…お昼食べてくださいね」

町田「はい。いただきます」

恵理「おにぎりおいしいですから」

町田「はい」

恵理「ちょっとごめんなさい」

恵理、町田の脇を通って、風呂場の扉あける。

恵理、風呂場の扉閉める。

恵理、風呂場の水で顔を洗い始める。

町田は風呂場の前で、立ち止まる。

縁側にいる笠間と桑原に、鳥の声が聞こえてくる。

笠間、桑原、携帯見るのをやめて、鳴き声の聞こえる方を見る。

笠間「変わった鳴き声だね。あの鳥」

桑原「本当。なんかリズムが変」

笠間「音痴じゃない？」

桑原「(立ち上がる) ちょっと見てこよっかな」

笠間「やめたほうがいいよ」

桑原「なんで？」

笠間「あの鳴き声、なんかヤダ」

桑原「そう？」

笠間「ついていったら、そのまま迷子になる気がする」

桑原「迷子って」

笠間「なんかわかんないけど、そんな気がする」

桑原「お、止んだ」

鳥が鳴き止む。二人、耳を澄ます。

鳴き声は聞こえない。

二人、顔を見合わせる。桑原、縁側に座る。

桑原「やめとくか」

笠間「うん」

笠間と桑原、携帯の画面に戻る。電波送信所について調べる。

恵理、風呂場で顔を洗っている。

町田は相変わらずそこに立ったまま。

風呂場の扉を見ている。

町田「…恵理さん」

恵理「はい？」

町田「どっか逃げちゃいませんか？」

間が空く。

恵理「は？」

間が空く。

町田「壁塗りながら、ずっと考えてたんです」

恵理、答えない。

町田、その場に立ったまま。

恵理「逃げればいいんじゃないですか。一人で」

町田「恵理さんは、逃げたがってるような気がします」

恵理「勝手に決めないでください」

間が空く。

町田「旦那さんが倒れたときのこと、教えてくださいな」

恵理は答えない。

町田「仕事から帰ってきて、買い物に出かけたって言ってたましたね。
…でも、僕が聞いた話は違います」

恵理は答えない。

町田「あの時、旦那さんと結構ひどい喧嘩して。
殴ったりはなかったけど、激しく言い合った後に、家から出てったんですよね。
それを追いかけてったら、玄関先で倒れてた」

恵理は答えない。

町田「旦那さん見つけた時、恵理さん包丁持ってたって聞きました」

恵理は答えない。

町田「包丁持って玄関出てきたって」

恵理は答えない。

町田「誰が言ったとかじゃなくて。これ噂なんで、本当は違うのかもしれないですけど」

恵理、答えない。

町田「別に、逃げちゃってもいいんじゃないですかね」

恵理、答えない。

町田「それだけです。それだけ言いたかったんです」

恵理、答えない。風呂場で固まっている。

町田、去っていく。廊下を抜けて、玄関を出て、縁側へ。

桑原と笠間、調べた事について話していた。

桑原「これ見てよ。送信所の作業班。この名前」

笠間「え？ 光・時空標準グループ？」

桑原「すごくない？ この名前？」

笠間「すごいね。なんかタイムパトロールみたい」

桑原「ほんとに。『俺たち、時空守っちゃってるんで』みたいなね」

笠間「すごい。会ってみたい。光・時空標準グループ」

桑原「どんな感じかな？」

笠間「そりゃあ、かなりきっちりしてるんじゃないですかね」

桑原「1秒刻みのスケジュールで」

笠間「そうそう」

そこへ、町田がやってくる。

笠間「ああ、町田さん」

町田「お昼いただいていいですか？」

笠間「どうぞどうぞ」

桑原と笠間、町田を迎える。

町田、縁側に腰掛ける。

恵理、風呂場の水を汲んで、顔を洗う。

洗い続ける。

総合病院・入院病棟・3階（8月）

サイレンが鳴っている。8月15日正午。

廊下では、看護師1、2、山崎がそれぞれの場所で黙祷している。

給湯室では、駒崎洋子が黙祷している。

病室では、浩二と千里が窓際に立って、黙祷している。

月野は自分のベッドに腰掛けている。その場で黙祷している。

(清水がいた) 窓際のもう一つのベッドには、駒崎洋輔がいる。
洋輔、ベッドにもたれて、タブレットでゲームしている。
洋輔のみ、サイレンの音は気にしていない。

サイレンがやむ。黙祷していたそれぞれが動き始める。
看護師1、2は各病室を見回って、移転先に運ぶ物品のチェックをしている。
粛々と進めていく。
山崎は、廊下を歩いて、エレベーターで下へ。
洋子は給湯室でお茶を入れている。

浩二、自分のベッドに腰かける。
ベッドの上には、浩二の荷物がまとめられている。
千里、窓外を眺め続けている。

千里「黙祷っていうと…あの花札爺さん思い出しますね」
浩二「清水さんね」
千里「…亡くなったそうですね」
浩二「ええ。俺も、今朝、聞きました」
千里「孤独死だったそうですね」
浩二「結局、退院してすぐ亡くなったみたいですね。発見されなかっただけで」
千里「変なもので、ずっと生きてると思っていました」
浩二「俺もです」
千里「…結局、だいぶ貸したままだったな」
浩二「俺もですよ」

二人、黙る。

千里「…お迎え、遅いですね」
浩二「そうですね」
千里「渋滞する時間でもないし」
浩二「なんやかや、準備に時間かかっているんじゃないですかね」
千里「奥さん、連絡しました？」
浩二「一応、携帯にメッセージだけ」

千里「そうですか」

千里、浩二を見る。

千里「奥さんにご挨拶できないのはアレですが、私ちょっと検査あるんで」

浩二「あ、はい。お世話になりました」

千里「いいえ。こちらこそ」

浩二と千里、握手する。

千里「退院おめでとうございます」

浩二「ありがとうございます」

千里「じゃあ」

浩二「はい」

千里、会釈して部屋を出て行く。

浩二、電波時計を手にとって、眺める。秒針を目で追う。

浩二、時計をベッドの上に置いて、荷物の入ったカバンを開く。

荷物を全部外に出す。そしてまた詰め直す。

駒崎直子が、トレーにお茶のポットとパンを数種類載せて入ってくる。

直子、洋輔のサイドテーブルにトレーを置く。

洋輔、ゲームをしたまま。

直子、ポットのお茶をカップに入れる。

直子、入れ終えて、耳を押さえる。

直子「さっきのさ、終戦記念のサイレンで気づいたんだけどさ」

洋輔、ゲームをしている。聞いていない。

直子「ねえ」

洋輔「(タブレット見たまま) なに」

直子「なんかずっと、耳鳴りがしてるんだよね。私もここで診てもらおうかな」

洋輔「(タブレット見たまま) 姉さん、昨日ライブ行っただろ？」
直子「やっぱそのせい？」
洋輔「耳鳴り、キーンてしてる？」
直子「うん。すごい高音」
洋輔「そっか」
直子「なに？」
洋輔「その音、いまのうちによく聞いといたほうがいいよ」
直子「なんで？」
洋輔「もう聞こえなくなるから」
直子「そうなの？」
洋輔「いまキーンって聞こえてるのは、残響なんだよ」
直子「残響？」
洋輔「うん。いま、実際に耳の中で鳴ってるわけじゃない」
直子「どういうこと？」
洋輔「鼓膜が傷ついたんだ」
直子「なにそれ？ 結構大変じゃない」
洋輔「そのうち修復する」
直子「なんだ。治るのか」
洋輔「でも完全に治るわけじゃない」
直子「え？」
洋輔「一部の周波数は、確実に聞こえなくなる」
直子「それがこの、いま聞こえてる音？」
洋輔「うん。耳鳴りがおさまったら、姉さんは、もうその高さの音は聞き取れない」
直子「え？ なんかちょっと怖い」
洋輔「大丈夫だよ。これからは、そもそも気づかないんから」
直子「そうだけどさ」
洋輔「はじめっから、その高さの音なんてなかったことになるんだ」

直子、両耳を両手で押える。耳鳴りを聞いてみる。

洋輔「そうやってどんどんなかったことにすればいいよ」

直子、耳鳴りを聞いている。洋輔の言葉は聞こえていない。

洋輔、ゲームを続けている。

月野、ベッドの上に起き上がる。

おもむろに、両手をパンパンパンと三回合わせる。

ベッドの枠をトンと叩く。

やや間を空けて、もう一度トンと叩く。

パンと一度合わせる。

トントんと二回叩く。

またパンと一度合わせる。

浩二、荷物を詰めながら、それを聞いている。

月野、今度はトントントントんと、4度叩く。

やや間を空けて、パンと一度。トンと一度。パンと一度。

やや間を空けて、パンと一度。トンと一度。

月野、パンパンパントン。トンパンパンパン。と送る。

その次に、トントントントン。パントンパン。パントン。と送る。

月野、それを繰り返している。

浩二、荷物を詰める手を止めて、月野を睨む。

月野は、浩二を見ない。

月野、同じリズムで、手の動きを繰り返している。

浩二、睨むのをやめて、立ち上がる。

振り返って、窓の外を見る。じっと見ている。

直子、耳を押さえてた手を離す。

洋輔、ゲームを続けている。

直子「ねえ？」

洋輔「なに？」

直子「さっきの耳鳴りの話、あれホント？」

洋輔「どうでしょう？」

直子「やっぱ嘘でしょ？」

洋輔「さあね」

直子「脅かそうとしてるだけでしょ？」

洋輔、答えない。

浩二、窓の外をじっと見ている。窓の外を森を眺める。

ふらっと、窓から離れる。

そのまま、ふらっと、病室の外に出て行く。

廊下を歩いていく。

直子「ねえ。そうなんでしょ？」

洋輔「うるさいよ」

直子「ホント、性格歪んでるんだから」

洋輔、ゲームを続けている。

直子、カップのお茶を飲む。菓子パンを頬張る。

月野は、手を止めて、寝転ぶ。また天井を眺める。

やがて目を瞑る。

エレベーターが開いて、恵理が降りてくる。

恵理、廊下を歩いて病室へ入っていく。

直子、恵理に気づいて会釈する。

恵理も直子に気づいて会釈。

恵理、浩二のベッドの前まで行く。置きっ放しの荷物を見る。

恵理、直子に、

恵理「あの」

直子「なんですか？」

恵理「浩二さん。ここのベッドの。どこ行きました？」

直子「さっきまで、そこにいましたけど」

恵理「行き先とかは？」

直子「ごめんなさい。聞いてないです」

恵理「いえ。ありがとうございます」

恵理、病室を出て行こうとする。

そこへ、看護師の山崎が入ってくる。

山崎「…院長、見てないですか？」

恵理、山崎に、

恵理「浩二さん」

山崎「え？」

恵理「浩二さん、見ませんでした？」

山崎「え？ え？ 見てないです」

恵理「どこ行ったんだろ」

山崎「トイレとかじゃないですか？」

恵理「そうですかね」

山崎「荷物ありますし」

恵理「なんかこの感じ、嫌だな」

恵理、部屋を出て行く。早足になる。だんだん早くなる。

山崎、その様子を見ていた。

恵理を追いかけるように部屋を出て行く。早足になる。

直子、ポカンとして入口の方を見ている。

洋輔はゲームをしている。

月野は横になったまま。天井を見ている。

古い家・園芸店（10月）

庭には、植木が並べられている。

土間には棚が作られて、所狭しと鉢が並べられている。

その他、玄関周りにも植物が置かれている。

縁側の窓は開いており、座布団が敷いてある。

その奥、畳の部屋にも植物が並べられている。

恵理は、風呂場で、せっせと花の茎を切っている。

浩二は、シャワーホースで、植木に水をやっている。

そこへ、山崎が庭を歩いてくる。

浩二、山崎に気づく。ホースの水を止める。

浩二「ああ。どうも」

山崎「開店おめでとうございます」

浩二「来てくれたんですね」

山崎「園芸店、一度見てみたくて」

山崎、浩二が水をやっていた植木を見る。

山崎「この庭の木も、全部新しく持ってきたんですか」

浩二「そうです」

山崎「へえ。すごい」

浩二「まだまだ、ですけどね。裏のハウスもこれからだし」

山崎「(家を見て) これ、裏もあるんですか？」

浩二「結構広いんですよ。あとで案内しましょうか？」

山崎「ありがとうございます」

山崎、植木を見て回る。

浩二、山崎についていく。

浩二「…病院の方は？」

山崎「ようやく新館に移転しました」

浩二「ああ。そうか。10月か」

山崎「はい。なんとか無事に」

浩二「かなり準備してましたもんね」

山崎「これで、ようやく休めます」

浩二「だいぶ無理してたんですか？」

山崎「しんどかったけど、なんとか切り抜けたって感じですね」

浩二「そうですか」

山崎「いろいろありましたから」

浩二、山崎、黙る。

浩二「昔の病院は、あのままですか？」

山崎「旧館の建物は、しばらくそのまま残るみたいです」

浩二「どんな感じになってるのかな？」

山崎「見てきました」

浩二「どうでした？」

山崎「抜け殻って感じですね。人がいないと別の場所みたいです」

山崎「そうですか」

二人、黙る。

浩二「…院長は？」

山崎「まだ、音信不通です」

浩二「生きてますかね？」

山崎「生きててほしいですけど」

浩二「そうですね」

間が空く。

浩二「院長が、病院放り出したって思ってる人が多いですね」

山崎「放り出したのかもしれないです。移転準備でだいぶ参ってみたいだし。

もともと、医者としても、背負い込んじゃうタイプだったから」

浩二「俺は。…あの人、放り出したんじゃないと思うんですよね」

山崎「なんでですか？」

浩二「なんでって」

間が空く。

浩二「…こう言っているのか。あの人は、逃げるほどの勇気もないと思う」

山崎「ああ」

浩二「それより人って。簡単なときは本当に簡単に、いなくなるから」

山崎「いなくなる？」

浩二「ええ。ふっと気づいたら、もうそこにはいない」

山崎、浩二を見る。

浩二「時間の際間に流されてしまう」

山崎、考えている。

浩二「いまはただ、偶然ここにいて。かろうじて踏み止まってるだけですよ」

浩二、足元を踏み固めてみる。

山崎、考えている。

浩二「あの人は、だから、どっちかっていうと放り出されたのかもしれない」

山崎「…時間の際間にですか？」

浩二「…少なくとも、俺はそう思ってます」

浩二、山崎を見る。

山崎「そうかもしれませんね」

二人、黙る。

浩二「お茶でも飲んで行きませんか？」

山崎「え？ 悪いですよ」

浩二「妻も、会いたいと思いますし」

山崎「そうですかね」

浩二「一杯だけでも」

山崎「…じゃあ、一杯だけ」

浩二「よかった」

浩二、縁側を案内する。

浩二「よければ、ここに座っててください」

山崎「ありがとうございます」

山崎、会釈して、縁側の座布団に腰掛ける。

鳥の鳴き声が聞こえてくる。

山崎、浩二、鳴き声の聞こえる方を見る。

山崎「変わった鳴き声ですね。あの鳥」

浩二「本当ですね。あんなの初めてだ」

山崎「聞かないですか？」

浩二「そうですね。普段は聞かないです」

山崎「変なりズム」

浩二「お、止んだ」

鳥が鳴き止む。二人、耳を澄ます。

鳴き声は聞こえない。

浩二「妻、呼んできますね」

山崎「はい」

浩二「あ、あとお茶ね」

山崎「お待ちしてます」

浩二、玄関に入って、台所から廊下へ入る。

廊下の先の風呂場にいる、恵理に声をかける。

浩二「山崎さんが来てくれたよ」

恵理「山崎さんって？ 看護師の？」

浩二「うん」

恵理「え？ まだいる？」

浩二「お茶出すって引き止めといた」

恵理「会いたい会いたい」

浩二「いこう」

恵理「ちょっと待って」

恵理、茎を切る作業を落ち着ける。

花を風呂場に置いて、水道で手を洗う。

待っている浩二。

縁側で待っている山崎。

そこへ再び、鳥の鳴き声が聞こえてくる。

山崎、鳴き声の聞こえてくる方を見る。

山崎、立ち上がる。

また座る。

もう一度立ち上がる。

山崎、ふらっと、鳴き声のする方へ歩いていく。

ふらふらと歩いて行く。もう二度と、戻ることはない。

恵理と浩二、連れ立って、土間を通り、玄関を出る。

だが、すでに縁側には、山崎がいない。

恵理「いないよ」

浩二「あれ？」

恵理と浩二、ひとしきりあたりを探す。

しかし、山崎はどこにも見当たらない。

浩二「さっきまで、いたんだけど…」

恵理と浩二、再びあたりを探す。

あたりは、二人の他に誰もいない。

(おわり)